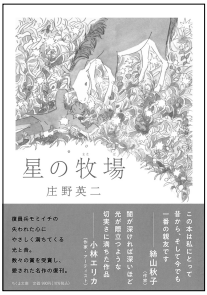


**『星の牧場』**

庄野英二　著

筑摩書房　刊

定価 990円（本体 900円＋税）

1963年発行の児童文学作品が復刊した。記憶喪失の復員兵が牧場で体験する幻想世界の物語で、戦地で傷ついた若者たちの戦後社会における姿であるかのように想像できる。

第二次世界大戦中に南方戦線に送られた天涯孤独の青年モミイチは、乗っていた船が敵艦の魚雷に沈んだときに愛馬ツキスミを失う。その後はマラリアの熱に苦しみ、終戦後に帰国したときには記憶喪失になっていて、ツキスミとの日々以外の記憶はほとんどなかった。戦前と同じように牧場で牛飼いとして働くが、ツキスミの蹄の音という幻聴にとらわれる。蹄の音を追って山奥をさまようちに、自由な生活と自然の恵みを謳歌するジプシーたちのオーケストラに出会う。モミイチの戦争による精神崩壊と死者への追慕、そしてオーケストラの奏でる煌めく音と圧巻の自然美に癒され、解き放たれる心の変遷が綴られる。ため息の出るような山奥の豊穣な世界は、現実世界と有機的につながっているようだ。

山奥のジプシーたちは一般的な人間社会の行動基準から外れ、自然の摂理に沿って生きるという神の視点に近い存在だ。そして、モミイチのかつての上官らの面影を持つ者もいる。青年期を戦線で過ごした著者は、戦争という強大な破壊活動の犠牲者たちを物語の中でだけでも理想郷に居させてあげたかったのだろうか。

戦後児童文学とされるこの作品には、戦地の禍々しく凄惨な場面は描かれていない。ひたすらに明るく自然とともに生きる人間の喜びが躍動している。あの痛ましい戦争を生き残った著者は、それ以外のことを次世代の子どもたちに望んだだろうか。

多様な生命体同士の授受と融合、大地の恵み、孤独と愛と思念。今に通じて考えさせられるテーマばかりで、一読では収拾がつかないが、読めば夢のような情景が優しく包み込んでくれる。

（日本農業新聞　齋藤（さいとう）　花（はな））